

宗家花火「鍵屋」15代目のこだわり

夜空にドーンと丸く打ち上がる花火。
もともと海の外から日本に伝来した火薬が
日本の文化に育まれながら
花火職人のこだわりによって独自の姿・形に花開いた。
どこから見ても球形で、何色もの鮮やかな光の層を
描く日本の花火技術は、世界一だといわれている。
江戸時代より続く花火の老舗「鍵屋」15代目は
新しい花火演出を試みながらも、
日本文化としての花火の質にこだわり続けている。

写真—羽切利夫



花火

今から340年前、奈良から江戸にやってきたある男が、葦の管に練って丸めた火薬を入れて売り出した。火薬を扱えたその男、弥兵衛がつくった花火は、江戸の人々の間で飛ぶように売れた。弥兵衛は両国に「鍵屋」という店を構え、代々が花火の研鑽を積んでいく。1733年に8代将軍・徳川吉宗の命で水神祭が催されたときには、鍵屋6代目が大花火を打ち上げて納涼花火大会の先鞭をつけた。以降、鍵屋は、世の人々に「花火といえば鍵屋」とうたわれながら、株式会社宗家花火鍵屋となった今日も、日本花火の伝統を守っている。

「日本の花火の良さは、なんといっても花火玉一つひとつの質が極めて高いことです」

現在、鍵屋15代目の花火師として数々の花火大会を仕切る天野安喜子さん。花火の素晴らしさについてうかがうと、即座に答えが戻ってきた。

「その精巧で緻密な美しさは、世界でも十分に認められています。海外ではまだ、日本の花火技術を真似できないんです」

球体美の追求

真夏の夜にドーンと打ち上げられる日本の花火を、ここで思い出してほしい。夜空に丸く広がる花火は、菊花の



「花火師」の天野さんが、花火芸術を創造・演出するデザイナーでありプロデューサーでもある。2年前からは花火のアカデミックな追究と花火演出の領域を広げるため、日本大学芸術学部の修士課程に通っている

ように同心円状の層をいくつも重ね、何色もの花びらで彩られている。「八重芯変化菊」などの名称があるこれら伝統花火は一般に、平面上の円とされている。しかし実際は、ボールのような球状をしており、上下左右どこから見ても同じ美しさを完璧に保つ。これが、日本の花火だけがなせる技であることを、知っていたらどうか。

「海外では、花火は何かのイベントやエンターテインメントを盛り上げるアトラクションと位置づけられています。でも日本では、花火大会が独立して成り立っているように、花火そのものを楽しみます」

筒口から上がる花火を今か今かと待つそぞろ感。大きく花開いたときの感動。消えてしまった後の余韻。いわば、これらすべてを味わうのが日本の花火の楽しみ方。そうなのは日本の花火職人が徹底したこだわりを持ち、花火一発だけでも十分に鑑賞できるほどに質を高めていったから。「結果として日本の花火は、海外のそれとはまったく異なる姿になった」と言う天野さんは、「その質の高さを育んだのが日本の文化」だと考える。

花火職人たちの巧緻な技術を少しでも把握するため、打ち上げ花火の典型「菊」を例に、日本の花火の仕組みについて簡単に触れておきたい。

先にも述べたとおり、日本の花火の特徴は、外国が筒型であるのと異なり、花火玉が球体で中心から均等に広がって花開く。ここで「自然と放射状に爆発するのだな」などと思わないように。これを可能にしているのが、花火の花びらに当たる「星」と呼ばれる火薬の配置。花火玉の殻の内側に、同心円状に層をつくるかたちできっちりと並べられている。二重、三重に花を持つ花火の場合、それぞれの花の中心がずれることなくぴったり重なって開くのは、「星」が緻密な設計のもとに詰められているからだ。

しかし、「星」の並びがいくら完璧であっても、花火玉を割る力、「星」を飛ばす力が均等に作用しなければ、完全な球形には開かない。ここで重要になるのが「星」の上に敷かれる「割火薬」。弱すぎず強すぎず、しかも均等な爆発力を発揮させるためには、「割火薬」に対しても熟練した工夫とノウハウが必要になる。

そのほか、花火玉の外に貼る紙や「星」と「割火薬」を仕切る薄紙、糊など、重要な要素はいくつもあるが、ここでは省略。

職人のこだわりや個性が分かりやすく表れるのは、なんといっても花火の色。天野さんは、花火大会に合わせて職人に花火制作を依頼するが、「おもしろいのは、同じ“赤色”の花火を頼んでも、Aさんの場合はピンクに近い赤、Bさんの場合は濃い紅の赤を放つ花火ができること。職人



それぞれに特徴がある」と話す。

「それが、長年培ってきた職人たちの伝統です。だから私もそれぞれの個性を把握して、“この演出ではピンク系の赤が出る花火を上げたい”と思ったらAさんに依頼する。色一つとっても、こだわりは捨てません」

花火の色は、火薬に混ぜた薬品と酸化剤、可燃剤が燃えることで鮮やかに表れる。赤色は炭酸ストロンチウム、緑色は硝酸バリウムというように、色によって使用する薬品が異なるが、これらの配合を工夫して独特の色を表すのが花火職人の腕の見せどころ。だから、たとえ同じ薬品を使っても作る人が違えば、同じ花火はできない。それが職人の自負でもある。

信頼に応える

3～5秒で消える一瞬の世界に、なぜこれほどまでこだわるのか。

「なぜでしょうね」と笑って天野さんが語るのは「達成感や充実感を味わったことがある人ほど、先へ先へと向かう姿勢にある」。

それがおそらくは答え。達成感や充実感の背景にあるのは、観客に満足してもらいたい、信頼に応えたいという一途な思い。「そういえば——」と天野さんは、ある苦い経験を思い出す。

大学を卒業後、2年間の花火修業に出て鍵屋に戻ってきた天野さんは、将来を考えて経営学の勉強を始める。そして当時14代目の父に進言した。

「鍵屋も株式会社。これからは利益を求めるシステムに変えるべき」

14代目はひと言。

「お前、鍵屋のこと何も分かってないな」

そこで会話は途切れた。答えをもらえなかった天野さんは「では、鍵屋は何なのか」としばらく悩み続ける。その結果、ある言葉にたどり着いた。

「信頼です。利益ではなく信頼を得るために一つの花火、一つの大会にこだわって仕事をする。それが鍵屋でした」

現在、天野さんは15代目の持ち味として、「音」を使った演出にこだわっている。花火大会全体を総合芸術と捉え、ストーリー性を持たせようとするのも天野さんならではの試みだ。

「とはいえ、10のうち7は一発ドーンと打ち上げて余韻を味わうスタイルです。これは崩さない」

最近では、派手やかにガンガン花火を上げるエキサイティングな花火大会が人気を博すようになっている。でも鍵屋としては、やはり一発一発をゆっくり上げる花火にこだわりたい。

「これが日本のリズムなんだ、日本の美しさなんだと、鍵屋の花火を見たお客さんに分かってもらえたらと思っています」



天野 安喜子 あまの・あきこ

1970年生まれ。2000年1月に鍵屋15代目を襲名。火薬類取扱保安責任者・火薬類製造保安責任者。小学校2年のときには、すでに鍵屋を継ぐことを決意。千葉の浦安、東京の江戸川大会など大規模花火大会を仕切るため、年間を通じて準備に追われている。かたわら、主婦業と子育てと大学院での勉強。大学時代は柔道の選手としても活躍。現在、国際柔道連盟の最年少女性コンチネンタル審判員として、海外の選手権の審判も務めている

株式会社 宗家花火鍵屋

日本の花火の歴史は、そのまま鍵屋の歴史と重なる。屋号は、鍵屋の守護神であるお稲荷さんの狐の一方が鍵をくわえていることに由来する。現在、代表取締役は14代目の天野修氏。14代目は、これまで人の手で打ち上げていた花火を「遠隔操作(電気点火)」するシステムを開発。これによって、安全で充実した花火の打ち上げが可能となった